The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	一日300ページ
Author(s)	中村, 啓佑
Citation	Gallia. 2016, 55, p. 189-190
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61948
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

一日 300 ページ

中村　啓佑

1962 年、春休み前のことである。4 月から専門に進む私たちは、和田誠三郎先生に呼ばれて「フランス語の本を、毎日 50 ページ読みなさい」と言われた。とにかくやってはみたけれど、ご想像どおり長くは続かなかった。

学部に入ってからの授業で、和田誠三郎先生は、またこうも言われた。

「いまフランスで勉強している赤木君は、Bibliothèque nationale で、一日 300 ページから 400 ページくらい本を読むそうだ ...」

一日 50 ページが続かなかった私たちは（わたしだけかも）、クラクラっとした。Bibliothèque nationale で一日 300 ページを読まれるという赤木先生は、私の頭の中では、長身で、痩せて、眼光鋭く、学問以外のことはあまり考えない、きびしい風貌の学者であった。

それから何年かして教養部に赴任された赤木先生は、私の想像とはまったく逆で、体つきも、もの言いも、全体にゆったりとして、物腰の柔らかな方であった。目の奥に知性がキラリと光っていたのは言うまでもない。

赤木先生は、以前は想像上の、この時期からは眼前の、私の理想であった。赤木先生のようになりたいという思いが長い間私を支えていたと思う。先生の存在は私の青春から壮年にかけて大きな意味をもっていたのである。ある時期から理想像でなくなったというのではない。私の方が、先生のようになる自信を失っただけのことである。

「一日 300 ページ！そんなに読めるものだろうか？和田先生の作り話とは言わないまでも、私たちを鼓舞するための誇張された話では」という疑問が時折浮かんだ。が、私は怖くてたずねることができなかった。20 年ばかりたったころだろうか、もう先生のようにはなれないと諦めていたので、あるパーティの席上、思い切ってたずねてみた。先生は豪快にお笑いになって、「まさかー」とおっしゃった。私は内心ホッとした。

しかし今になって考えると、あのお答えはヒョットしたら一種のてれ、あるいは謙虚さの表れではなかったのか。あのお仕事ぶりから想像すると何となくそういう気がしてくる。

直接の教えを受けたことはほとんどないのだが、理想像として青春の私を導いてくださったことに対して、こころから感謝している。

付記

本エッセーは、『ガリア』54 号赤木昭三名誉教授追悼号に掲載予定でしたが、編集部のミスにより掲載できませんでした。ここに、中村啓佑先生のお許しを得て、掲載させて頂きます。中村啓佑先生、読者のみなさまに多大なご迷惑をお掛けいたしましたことをお詫び申し上げます。（編集部）